

## 火山防災のための教育普及に関する実践的研究 エコミュージアムのコンセプトを適用した事例について

○福島 大輔・石原 和弘

### 1. はじめに

自然災害は地域ごとに特色があり、その地域のリスクに合った対策が重要である。地域をまるごと博物館と考え現地で本物を展示するというエコミュージアムのコンセプトは、その地域の自然や災害の特色を伝えるという防災にとって極めて重要な役割を果すことが可能である。本研究では、日本で最も活動的な火山の一つである桜島でエコミュージアムのコンセプトを適用した実践を行い、火山防災のための教育普及の方法論を探っている。ここでは、その理念とこれまでの実践例を紹介する。

### 2. エコミュージアムのコンセプト

エコミュージアムとは、1970 年代にフランスの博物館学者リヴィエールによって提唱されたコンセプトで、自然・文化・産業遺産を特定の施設に閉じこめず、そのまま生きた博物館と捉え、研究や生涯学習の場にしようとするものである。近年日本でも注目されつつあるが、地元の遺産を再発見しアピールするという地域振興を目的としている場合がほとんどである。

これまで地域住民の防災意識の向上を目的としてエコミュージアムのコンセプトが適用された例はない。しかし、地域の自然や文化は災害と密接に関連していることが多く、地域そのものを生涯学習の場とすることで、住民の防災意識が向上することが期待できる。

本研究では、エコミュージアムのコンセプトを桜島で実践するために、まず、桜島の自然と文化を楽しむための市民団体「桜島友の会」を発足させた。この会を発足させた目的の一つは、実践を通して参加者の反応やアンケート結果などを分析し、その問題点や方法論を探ることにある。2004 年 1 月までに行ったイベントは 27 回で、講演会、一般向けの体験型ツアー、小中学校の総合学習や体験学習などである。

### 3. 実践例

#### (1) 講演会

これまでに、防災関係の講演会を 3 回行っている。ある講演会では、200 人収容できる桜島島内の会場を使用し、防災関係者、学校等に告知したほか、マスコミ、防災無線を使って一般家庭にも告知したが、参加者はわずか 30 名であった。一般に講演会は面白くないものと思われている

一方、参加者のアンケート結果を見ると、「おもしろかった」「また参加したい」という回答が 8 割を超えており、教育的効果が高かったことを示している。防災意識の高い人にとって講演会は重要な機会であり、開催頻度を増やすべきであるが、普及としての効果は低いと思われる。

#### (2) 体験型ツアー

一般向けの体験型ツアー等はこれまでに 20 回行っている。参加者は 20 代～80 代と幅広く、夫婦や親子連れも多い。延べ参加者数は約 500 名で、講演会より人気が高い。このうち 2 回以上参加したリピーターが約 3 割である。

テーマは防災と直接関係あるものから無関係のものまで様々なものを用意した。内容よりも「今回だけ」「特別に」などのフレーズに良く反応する傾向があり、イベント告知の仕方によって参加者数は激変する。また、身近なテーマと火山との意外な「つながり」に感動し、知的好奇心に訴えるプログラムの評判が良い。

#### (3) 総合学習・体験学習

小学校、中学校、高校で各 1 回ずつ、総合的な学習の時間を使って桜島に関する授業・体験学習を行った。中学校の体験学習では 280 名の生徒を受け入れた。まず 20 分の講演で桜島の概要を解説した後、桜島ならではの 12 コースに分けて体験学習を行った。アンケートの結果、体を動かすような体験コースの反応が良く、知的好奇心に訴えるような解説コースは反応が悪かった。大人が知的好奇心に訴えるプログラムが有効であるのとは対照的であり、子供向けに知識の普及を図る場合には工夫が必要である。